

近世河内・大坂地域における善光寺の布教活動

伊藤 純

要旨 戦国時代以降、河内・大坂地域で信濃善光寺が信仰を拡大していった過程を明らかにする。

永祿元年（一五五八）以降、善光寺では本尊が不在となり、荒廢する。慶長三年に本尊が戻り、翌年から修復工事が始まる。工事の財源を確保するために慶長二年（一五九七）に三十三詣を達成した小山善光寺の宗珍に「善光寺参詣曼荼羅」を与え、河内での布教の拠点とする。小山善光寺では曼荼羅を活用し善光寺への財源を確保しながら、自らの財も貯え、慶長十二年（一六〇七）に再興を果たす。

一七世紀中頃に難波の堀江＝阿弥陀池が大坂の地に見い出される。元祿七年（一六九四）には大坂で善光寺如来の出開帳が行われ、その後善光寺講ができる。元祿十一年（一六九八）、堀江川が開削され、堀江地域開発の要となる和光寺が創建されるのである。

江戸後期になると融通念仏宗の強力なネットワークにのる形で、垣内善光寺が新たな布教拠点となる。

このように善光寺は河内・大坂地域においてそれぞれの土地の事情を踏まえながら、自らへの信仰＝集客＝財源の拡大を行なっていた。善光寺の布教活動で拠点となった寺や地域と善光寺との関係は、俗な表現をとれば「持ちつ持たれつ」であった。

はじめに

信濃の善光寺は無宗派の単立寺院である。天台宗の大勧進貫主（僧）と、浄土宗の大本願上人（尼僧）が住職を務めている。本尊は阿弥陀如来を中心に、向かって右側に観音菩薩、左側には勢至菩薩、この三尊が一つの光背を背にして立つ「一光三尊阿弥陀如来」（善光寺式阿弥陀如来）である。

欽明天皇の時代に仏教が伝来した時のこと。天皇は仏教の導入に積極的な蘇我氏に仏像を与えたが、しばらくすると国内で悪病が流行した。排仏派の物部氏は、異国の神を祀ったことに対する日本の神の祟りと考え、仏像を難波の堀江に棄ててしまう。しばらくの後、推古天皇の時代になり、信濃国の本田善光が難波の堀江にさしかかった時、水中から突然に如来が姿を現し、善光とともに信濃へ移り、そこで建立されたのが善光寺という。

今日よく知られている善光寺の縁起である。

善光寺では丑年と未年の六年目ごとに開帳が行われている。本尊は絶対の秘仏とされており、開帳されるのは前立ちの本尊である。平成二七（二〇一五）未年の四月五日から五月三十一日の開帳では七〇七万七七〇〇人の参詣者があったという。平成二一年（二〇〇九）丑年の六七三万人を三四人も上回り、過去最高の参詣者数だったという⁽¹⁾。

善光寺に対するこのような巨大な信仰は一朝一夕に成ったものでない。善光寺自身による積極的な布教活動と、布教活動が行われたそれぞれの地域の事情とが、双方に都合よく重なり合い、信仰が拡大していったのだろう。

本稿では戦国時代以降、世の中が安定した近世社会、日本の中でも人口が集中していた河内・大坂地域において、善光寺がどのように信仰集客を拡大していったのかを跡付けてみたい。

なお、善光寺を語る際にしばしば問題となる縁起と、絶対の秘仏とされる本尊については、本稿の目的とするところではないので論及しない⁽²⁾。

一 荒廃した善光寺 — 受難の戦国時代 —

善光寺の歴史にあつて、苦難の時代、言い換えれば寺として最も荒廃したのは後述するように戦国時代であるが、それ以前にも度々の火災があり、そのつどに再興されてきた。大きな火災を年表的に示すと以下のようである⁽³⁾。

治承三年（一一七九）善光寺、焼失。

文治三年（一一八七）源頼朝は信濃国の目代や武士に善光寺再興に協

力を命じる。

建久二年（一一九二）再建、落成。

文永五年（一二六八）善光寺、焼失。

文永八年（一二七二）再建、完成。

正和二年（一三三三）善光寺、焼失。

正和三年（一三三四）再建に際し、用材が飛来したとされ、この図が

京都に伝わる。

応安三年（一三七〇）善光寺、火災。

応永二〇年（一四一三）金堂修造供養。

応永三四年（一四二七）堂塔、全焼。

文明六年（一四七四）善光寺、如来堂など焼失。

文明九年（一四七七）善光寺本堂、炎上。

このように、戦国時代以前にも堂宇の焼失と、再建が繰り返されてきた。しかし、これらの災難は、善光寺の寺域内で起こったことであり、これから述べる戦国時代の状況とは大きく異なるといえよう。

一六世紀の中頃から末にかけての半世紀程の間、善光寺は未曾有の危機であった。戦国時代の状況を示すと、以下のようである⁽⁴⁾。

永祿元年（一五五八）九月十五日

川中島合戦の際、武田信玄が本尊を甲州へ移す。

永祿七年（一五六四）六月三日

甲斐善光寺の本堂上棟する。

天正一〇年（一五八二）三月二一日

武田氏、亡びる。

天正一〇年（一五八二）四月

織田信長の長男・信忠は本尊を岐阜へ移す。

天正一〇年（一五八二）六月二日

本能寺の変。織田信雄が本尊を尾張甚目寺に移す。

天正一一年（一五八三）六月

徳川家康は本尊を尾張から甲斐の善光寺に移す。

慶長二年（一五九七）七月一日

豊臣秀吉が本尊を京都に移す。慶長の大地震（一五九五年）で倒壊した大仏の代り。

この年、河内小山善光寺の宗珍が信濃善光寺に三十三度詣をする。

慶長三年（一五九八）

秀吉体調がすぐれず、周囲は秀吉に本尊を信濃に返すように勧める。

慶長三年（一五九八）八月十七日

秀吉、本尊を信濃にかえす。翌日、秀吉没。

慶長四年（一五九九）三月四日

信濃善光寺の本堂、普請始まる。

慶長五年（一六〇〇）夏

善光寺本堂落成。

永祿元年（一五五八）に武田信玄によって本尊が甲斐国に移されてから、慶長三年（一五九八）までの半世紀近く善光寺には本尊はなく、荒廃を極めた。小林計一郎氏は、天正九年（一五八一）に伊勢の御師が長野近所の四五軒に札を配った際、善光寺の近辺では一軒だけだったと、その頃の善光寺と周辺の町の荒廃した様子を紹介している⁵⁾。この間、火災による本堂の焼失はなかったようであるが、本尊が戻った慶長三年（一五九八）の翌年から本堂の建築工事が始まっていることから、本尊不在の間に

善光寺はたいそう荒れていたと思われる。

このような状況の中で小山善光寺の宗珍なる僧が、本尊不在の善光寺にもかわらず三十三度詣を慶長二年（一五九七）に達成していたことは注目すべき出来事であろう。

二 小山善光寺 ―河内・大坂での最初の拠点―

藤井寺市小山に所在する小山善光寺は、天正年間までは前方後円墳である津堂城山古墳の後円部西側に位置する現小字名「善光寺屋敷址」にあった。津堂城山古墳上には小山城の本丸と二ノ丸が築かれていた。安見氏が居城としていた小山城は、永祿九年（一五六六）に三好康重に攻められ落城し、三好氏の支配するところとなった。その後、天正元年（一五七三）織田信長によって攻撃され落城し、天正三年（一五七五）信長の河内諸城破却によって廃城となった⁶⁾。小山城の城域にあった善光寺も兵乱に巻き込まれ荒廃した。

慶長年間になり、小山善光寺の僧宗珍に善光寺如来の靈感があつて、信濃の善光寺に三三回も参拝した⁷⁾。先に見たように、三十三度詣を達成したのが慶長二年（一五九七）である。その一〇年後の慶長一二年（一六〇七）、宗珍は兵火よつて荒廃した小山善光寺を再興する⁸⁾。

一方、永祿元年（一五五八）以来、信濃を離れていた本尊が、信濃の地に戻ったのが慶長三年（一五九八）のこと。本尊不在の間に荒廃した伽藍本堂の修復工事が始まるのが慶長四年（一五九九）、翌慶長五年（一六〇〇）夏に本堂が落成する。この頃の信濃善光寺と小山善光寺の出来事を年表的に整理すると以下のようなようになる。

永祿元年（一五五八）信濃善光寺の本尊甲州へ。

天正三年（一五七五）信長の河内諸城破却によって小山城廢城。小山善光寺も荒廢。

慶長二年（一五九七）小山善光寺の宗珍が本尊不在の信濃善光寺に三十三度詣をする

慶長三年（一五九八）豊臣秀吉、本尊を信濃にかえす。

慶長四年（一五九九）信濃善光寺の本堂、普請始まる。

慶長五年（一六〇〇）善光寺本堂落成。

慶長一二年（一六〇七）宗珍が小山善光寺を再興。

このような流れを見ると、信濃善光寺の荒廢と再建、小山善光寺の荒廢と再興が絡み合っていることが分かる。この間の事情を物語ると思われる曼荼羅がある。小山善光寺で一九八五年に発見された「善光寺參詣曼荼羅」である。

この曼荼羅は中央に信濃善光寺の伽藍と周辺の景観を描き、左右の両側に信濃善光寺の縁起絵を配している。この曼荼羅の制作年代については、既にくいつもの論考が発表されている⁽⁹⁾。いずれの論考でも一六世紀後半〜末頃成立といった時間幅の中で制作年が語られている。いくつもの論考の中で「慶長五年夏の豊臣秀頼の寄進による如来堂再建時の勧進のために善光寺參詣曼荼羅が作成された」と推定することが最も妥当ではないでしょうか。」とする石鼻通明氏の見解が、信濃と小山との一六世紀中頃から一七世紀初頭の状況を踏まえると、私も最も妥当と考ええる。

本尊不在の間に荒廢した善光寺は、本尊が返ってくるや否や、本堂の修復工事に着手する。そのためには必要な財源をいそぎ集めなくてはならない。財源の確保は、即ち善光寺に対する信仰を拡大することである。信濃

善光寺は、本尊不在の時であっても、熱心に信仰を貫き、慶長二年（一五九七）に三十三度詣を達成した小山善光寺の宗珍を通じて、河内地域での信仰の拡大（財源の確保）をはかったのであろう。小山善光寺側でも信濃善光寺から与えられた「善光寺參詣曼荼羅」を活用することによって、信濃への信仰の拡大に寄与するだけでなく、自らの小山への信仰の拡大にもつながったに違いない。慶長四年から始まった本堂の普請工事が、翌五年という短時間で落成しているという事実は、小山善光寺を拠点とした河内地域での布教活動が、修復工事の財源の一端を支えていたのであろう。小山善光寺でも信濃へ財源を供給してただけでなく、自らも財を貯えていくことによって、荒廢していた寺を慶長一二年（一六〇七）に再興することができたのであろう。

小山善光寺には近年発見された曼荼羅とは別に「南命山無量寿院善光寺縁起」⁽¹⁰⁾が伝わっている。跋文には

慶長二己酉年記之

元和五己未年改之

南命山無量寿院

善光寺

享保十七壬子大簇上院再写之

と記されている。縁起の概要は以下のようである。

当寺の本尊は、信濃善光寺の南面無量寿院の如来と一体分身である。推古天皇の時代、大和豊良宮の警固を終えた信州伊那郡麻績郷の本田善光が帰国しようとした際、浪花の池のほとりで光る物を見た。これが善光寺如

来。如来は善光の前世と因縁を語り、善光の背中に飛び移る。

その頃、小山には隆聖という念仏僧がいて、善光に如来を小山に留めるように頼んだ。二人は如来の前で三日三晩念仏を唱えたところ、如来が左右に顕現した。分身した如来を小山にとどめ、水中から現れた如来を信州に運んだ。隆聖は小山に善光寺を建立し、如来を安置する。推古天皇十年のことである。

その後、天正頃に兵火にかかり荒廃する。

慶長年間に宗珍という僧がいて、信州の善光寺への三十三度参りが満願した帰り、小山の松田某の家に泊まった夜に、夢の中で如来が現れる。宗珍から話を聞いた松田某は、屋敷に秘めた本尊を宗珍に示したところ、夢に現れた如来であった。二人は仏殿を建立し如来を安置した。

この縁起は跋文によれば「慶長二己酉年」に成立したとある。慶長二年（一五九七）は丁酉であり、己酉ならば慶長一四年（一六〇九）である。

縁起の中で宗珍が仏殿を建立した話が出てくるので、この縁起が成立したのは小山善光寺が再興された慶長一二年（一六〇七）以降のことであることは明らかである。「慶長二己酉年」は正しくは「慶長十四己酉年」と思われ、元和五年（一六一九）に改められた時か、享保一七年（一七三二）に再写された時に誤写されたのであろう。信濃善光寺の布教拠点となりながら、自らも財を貯えながら、ついに慶長一二年に堂宇の再興がなったことを機に縁起が整えられたのであろう。この時に小山善光寺の本尊について、小山の地で信濃善光寺の本尊となる仏像から分身したものであるとの起源譚が創られ、縁起に盛り込まれたのであろう。

三 大坂和光寺 — 大都市大坂での拠点 —

和光寺といえは阿弥陀池であり、池の傍らには「善光寺如来出現之靈地の石碑が立っている。和光寺、阿弥陀池に関する最初の史料は延宝三年（一六七五）の『葦分船』であろう。

四橋といふあり。それより三町ばかりにし、南商家のうらに池あり。是をあみたか池といふ。…（中略）…御長一尺五寸の阿弥陀、観音、勢至の三尊を鑄給ひ、貴賤の病をすくひたまへり。仏滅度の後、百済国にわたり給ひ。一千余歳の後。斉明王より吾朝欽明天皇の御時、日本にうつらせ給ひ。撰津国難波のうらにと、まらせ給ふ。（今此池の中也）其時、信濃国の住人本田善光夫婦都に上りけるに、如来の御告ありて如来を信濃国にくたし奉り、一寺を建立し、今に善光寺と申けるハ、わが名によせしゆへなりとぞ。

これによれば、阿弥陀池と本田善光が登場するも、寺としての和光寺は見えない。一七世紀中頃に善光寺如来が出現したとされる難波の堀江（阿弥陀池）が、大坂の地に見い出されたのである。

次に善光寺関連の記録が認められるのは『撰陽奇観』元禄七年（一六九四）の記述である。

当夏六月廿四日より十月迄洛東真如堂にて信州善光寺如来開帳有之。夫より大坂へ御下向二而四天王寺二於て開帳これ善光寺如来大坂初ての開帳二付参詣群衆ス。…（中略）…信州善光寺如来、京都または大

坂へ出開帳之節は必ず角太夫の芝居其辺りにて興行に及ぶ。

これは信濃善光寺が本堂を修復するために元禄五年（一六九二）から七年（一六九四）に行った第一回目の回国出開帳の記述である⁽¹¹⁾。元禄五年に江戸本所の回向院での開帳後、一年置いた元禄七年には京都の真如堂、その後大坂四天王寺で開帳が行われた。大坂での開帳はたいそうな人出だったらしく、宿泊所が不足したので、天王寺の近辺や安治川、木津川の船着場の町々に開帳中に臨時宿泊所を設けることに許可が出たほどである⁽¹²⁾。この出開帳を機に、大坂の地で善光寺如来への信仰が高まるのである。

自是以来、善光寺講と号けて、此池の辺にて、念佛執行の室を構へ、常夜燈を置り。是則善光寺本堂、仏前の夜燈移す所也。

とあるように⁽¹³⁾、この大盛況の出開帳のあとに善光寺講ができ、阿弥陀池に念仏堂が構えられるのである。

阿弥陀池、善光寺如来の出開帳、善光寺講の成立、そしてついに寺としての和光寺が創建される。

『撰陽奇観』元禄十一年（一六九八）

一 堀江あみだ池 和光寺立

蓮池山知善院和光寺 本堂額和光寺（宝鏡寺宮徳嚴皇女御筆）

本尊弥陀外帳（葵之御紋也）昌院之御寄附と云 信濃善光四之

内南命山無量樹寺の本尊を此寺ニ安置ス …（中略）…

元禄中寅年（一一年）信州善光寺百十三世之大本願 知善上人
二千八百八十坪之地ヲ賜ル

これによれば、元禄十一年に信濃善光寺の「南命山無量樹寺」の本尊をいただき、知善という僧が一八八〇坪の土地を賜って和光寺を建立したと移されてきた「南命山無量樹寺」の本尊は寺伝によれば伊豆国走湯山浄蓮上人源延僧都が承久三年（一二二二）五月一日に信濃善光寺の本尊を鋳写したものである⁽¹⁴⁾。和光寺が創建された元禄十一年は堀江川が開削された年である。堀江地域の開発を強力に推し進めるためにも、善光寺を背景にした信仰の大いなる高揚の拠点として多くの人が集まる場、を設けるために和光寺が建立されたことが分かる。

四 垣内善光寺―江戸後期のさらなる布教活動―

垣内善光寺は八尾市垣内、高安山のもとあたりに位置している融通念仏宗の寺院である。通称「元善光寺」という。

本来はこの寺が所蔵していたはずの「河内国高安郡善光寺縁起」が、八尾市東本町の所在する融通念仏宗の清慶寺に所蔵されている。この縁起については小谷利明氏の論考がある⁽¹⁵⁾。

縁起の内容は以下のようなものである。

推古一〇年に本田善光が浪華で如来を感得し、信濃に下る時、垣内村の老女宅に泊まる。老女は、善光にここに留まって人々を救済するように頼んだが、善光は信濃に下ってしまった。そこで老女は出家し、自宅を庵と

した。信濃に戻った善光は、勅許により善光寺を建立した。後に善光が京都に来た際に垣内に立ち寄り、老女の庵に善光精舎の名をつけ、聖徳太子が鑄造した一光三尊仏を与えた。：(中略)：元禄の頃に鴨川氏の子孫が病気になった際に垣内善光寺の本尊に祈念すると、たちまちに回復した。本尊を諸人が常に拝するのは恐れ多いとし、厨子を作り、教誓上人に寄付し秘仏としたという。

元禄の話が登場するので、この縁起は元禄以降に成立した縁起であることは明らかである。

垣内善光寺の宗派である融通念仏宗と、善光寺の関係を語る史料がある。大阪市東成区深江南三丁目、暗越奈良街道に面した、かつては法明寺の山門のあった所に立つ法明寺案内地蔵⁽¹⁶⁾の傍らに立つ石碑である。

- (右) 寛政九丁巳年十月四日御入佛 當寺境内尔 鷹塚の古跡阿り
- (正) 融通大念佛宗中興法明上人舊蹟 深江村 法明寺
- (左) 善光寺如来安置 信州善光寺如来日本回国 結縁開帳越年之所
- (裏) (読めず)

と刻まれている。江戸時代に行われた五回目の善光寺如来の回国出開帳が法明寺で行われたことを刻んでいる。この時の開帳は、寛政六年(一七九四)に善光寺を出発し、日本海側を回り、七年山陰・山陽地方、八年には山陽地方から九州地方、九年(一七九七)には九州から四国、大坂深江の法明寺で年を越し、一〇年二月一日から一五日に法明寺で開帳が行われた。さらに中山道沿いに進み九年六月に信濃に戻った⁽¹⁷⁾。

河内・大坂地方での開帳が、すでに関係のある小山善光寺や和光寺でなく、法明寺が選ばれたのはなぜであろう。それは法明寺が融通念仏宗の有力な寺だったからであろう。融通念仏宗には本山大念仏寺の本尊天得如来画像を、末寺や檀家へ巡回する御回在というこの宗派独自の行事がある。

本山・末寺・信者が御回在によって強力に結ばれているのである。垣内善光寺は融通念仏宗であり、信濃善光寺は御回在の強力なネットワークを利用する形で、垣内善光寺を拠点として元禄以降にさらなる布教活動を行ったものと考えられる。「河内国高安郡善光寺縁起」の成立時期は、石碑の記す寛政九年(一七九七)に前後する時期ではなからうか。その後、江戸後期から明治時代にはいくつもの講集団がつくられ、垣内善光寺に対する信仰が高揚する⁽¹⁸⁾。

むすびにかえて

これまでのべてきたことを時系列に整理してみたい。

永禄元年(一五五八)以降、善光寺の本尊は信濃を離れ各地を転々とする。本尊不在の間善光寺は大いに荒廃する。本尊不在の信濃善光寺でありながら、小山善光寺の宗珍は参詣し続け、慶長二年(一五九七)に三十三度詣を達成する。慶長三年(一五九八)本尊が信濃の地に戻ると、すぐさま翌年から本堂の修復工事が始まる。善光寺は強い縁の出来た小山善光寺に「善光寺参詣曼荼羅」を与え、修理工事の財源を確保するための河内の拠点とする。小山善光寺は与えられた曼荼羅を活用し信濃善光寺への財源を確保しながら、自らの財も貯え、慶長一二年(一六〇七)に再興を果たす。善光寺はなぜ河内の小山善光寺を拠点としたのか。宗珍との縁が下

敷きにあったことは当然のことながら、後に大都市となる大坂の町は建設が始まったばかりで、布教の対象とする人の数が少なかったからであろう。

善光寺に対する信仰が拡大していく途上にあつて、一七世紀中頃に善光寺縁起に出る難波の堀江Ⅱ阿弥陀池が大坂の地に見い出される。その後、元禄七年（一六九四）に四天王寺で善光寺如来の出開帳が行われ大盛況となる。出開帳のあとに善光寺講ができ、阿弥陀池に念仏堂を構える。元禄十一年（一六九八）、堀江川が開削され、堀江地域開発の要となるべく和光寺が創建されるのである。大都市となった大坂に、しっかりとした善光寺の布教拠点が確立されたのである。

江戸後期になると融通念仏宗の強力なネットワークにのる形で、新たな布教拠点の垣内善光寺が登場するのである。

このように善光寺は河内・大坂地域においてそれぞれの土地の事情を充分に踏まえながら、自らへの信仰Ⅱ集客Ⅱ財源の拡大を行ってきたのである。善光寺の信仰拡大の拠点となった寺や地域でも、善光寺への協力が自らの信仰Ⅱ集客Ⅱ財源の拡大となっていたのである。善光寺の布教活動で、河内・大坂で時々には拠点となった寺や地域と善光寺との関係は、俗な表現をとれば「持ちつ持たれつ」であった。

註

(1) 二〇一五年六月三日、信濃毎日新聞の報道。

(2) 縁起については、牛山佳幸『善光寺縁起』の成長（『古代・中世人の祈り』長野市立博物館 一九九七年）、倉田邦雄・倉田治夫『善光寺縁起集成Ⅰ』（龍鳳書房 二〇〇一年）、田島公『科野国造と善光寺平の豪族・部民』

（『長野市誌』二巻 二〇〇〇年）、同『東人の荷前』（『東国の調』）と『科野屯倉』（『律令制国家と古代社会』塙書房 二〇〇五年）などを参照されたい。秘仏本尊については、坂井衡平「善光寺本尊論」（『善光寺史』上 東京美術 一九六九年）、小林計一郎「善光寺本尊」（『善光寺さん』銀河書房 一九七三年）を参照されたい。

(3) 善光寺については詳細な年表がつくられているが、ここでは小林計一郎『善光寺さん』（銀河書房 一九七八年）、同『善光寺史研究』信濃毎日新聞社 二〇〇〇年の年表によった。

(4) 註(3)に同じ。

(5) 小林計一郎『善光寺さん』一二六頁。

(6) 『小山城』（『日本城郭大系』一二巻 新人物往来社 一九八一年）。

(7) 里上龍平「善光寺と融通念仏宗の寺院」（『藤井寺市史』二巻 二〇〇二年）

(8) 井上正雄『大阪府全志』（大阪府全志発行所 一九二二年）。

(9) この曼荼羅の制作年代に論及した主なものは、西山克「善光寺参詣曼荼羅は語る」（『藤井寺市史』一巻 一九九七年）、岩鼻通明「描かれた善光寺と記された善光寺」（『古代・中世人の祈り』長野市立博物館 一九九七年）、小林計一郎「小山善光寺『善光寺参詣曼荼羅図』」（『善光寺史研究』信濃毎日新聞社 二〇〇〇年）、寺沢慎吾「善光寺参詣曼荼羅について」（『フィロカラ』二八 大阪大学大学院文学研究科 二〇一一年）などがある。

(10) 『藤井寺市史』六巻（一九八三年）五九二頁。

(11) 真野俊和「善光寺如来日本廻国の旅」（『聖なる旅』東京堂出版 一九九一年）、尾崎行也「近世における善光寺の出開帳」（『善光寺本坊大勧進宝物集』郷土出版社 一九九九年）。

(12) 『大阪市史』一巻（一九一三年）五〇七頁。

(13) 『撰陽群談』第四 池の部「阿弥陀池」の項。

(14) 『西区史』三巻（一九七九年）二二八頁。



和光寺の池

- (15) 小谷利明「清慶寺蔵『河内国高安郡垣内村善光寺縁起』について」(『八尾市立歴史民俗資料館研究紀要』六 一九九五年)。
- (16) 『東大阪市の歴史と文化財 改訂版』(二〇〇三年) 九頁。
- (17) 尾崎行也「近世における善光寺の出開帳」(『善光寺本坊大勧進宝物集』郷土出版社 一九九九年)。
- (18) 立石則也「近代大阪における善光寺信仰と垣内善光寺」(『京都民俗』一五 一九九七年)。

Process of Propagation by Zenkoji Temple Conducted in Kawachi, Osaka Area During Seventeenth to Nineteenth Century

ITO Jun

One of famous temples in Japan—Zenkoji is located in Nagano prefecture. It has been earnestly worshipped among many people. These are reasons it has been successfully popular.

They had widely propagated the teach in various area around the country. For instance, in the end of the 16 th century, in Kawachi or Osaka area, they used Koyama Zenkoji as the base, and the end of the 17 th century, they built Wakoji temple where was the west district in Osaka(city) then.

Furthermore, turn to the 18 th century, they shifted their base to Kaichi Zenkoji that had one of the sects (Yuzunenbutsu) in Kawachi area from Wakoji temple. They propagated their teach broader and broader with making use of the stable networks of the sects. These support and the networks for Zenkoji had brought some profit both Zenkoji and these other temples.